

部活の惑星

普連土学園 理科部 (東京都)

夢をのせて、発射!

5

がむしゃらに進んだ軌道。その先にパリ。

2回目の発射の前に、チームMERN(メルン)の作業テントは慌ただしかった。ロケットに搭載する生卵を守る緩衝材を増やす作業だ。

緩衝材といっても、要は、割れ物などを梱包する時に使うプチプチできるシートと、果物を包むフルーツキャップ(あの網目状になった白いヤツ)。

多少の重量アップはかまわない。落下時にどんな力がかかるのかを推測し、弱そうなところを狙って緩衝材を詰めた。

どこまで防御力がアップするかは分からないが、人事を尽くして天命を待つ。4人は覚悟を決め、発射台に向かった。

2回目も発射スイッチを押すのはリナだ。

「3、2、1」。カウントダウンを終え、離陸したロケット。今回は軌道はバッチリ。ミニパラシュートは相変わらずイマイチだが、これも想定範囲内だ。

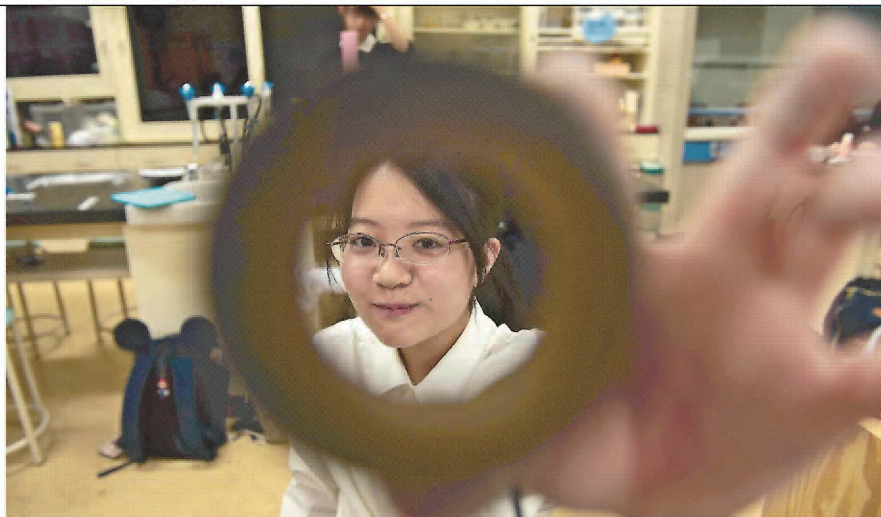
回収したロケットの高度を確認。2回目の目標の253mに対し233m。悪くない。あとは卵3個が無傷かどうか——。

ネオは意を決し、緩衝材を取り除き始めた。

「一つ目オッケー」。審査員が宣言する。二つ目も無事。そして運命の三つ目は……

「オッケー!」

「きゃあぁー」。モモコ、エミリ、リナの3人は悲鳴のよ



うな叫び声を上げ、跳び回った。一方のネオは、全身の力が一気に抜けた。記録が、残った。

優勝 国際大会へ

チームが残せたのは、記録だけではなかった。

その後、行われた表彰式。「優勝チーム……普連土学園、チームMERN!」

強豪校がロケットを見失うなどのハプニングがあったものの、記録を残せた3校の中でも圧倒的な好成績。難度の高い今回の規定に苦しめられたのは、自分たちだけじゃなかった。

想定外の結果に喜びを爆発させた4人——となるどころどころで、表彰式後、4人が見せたのは少し複雑な表情。実は優勝校には、2019年6月にパリ航空ショーで開催される国際大会への出場権が与えられる。世界の強豪と渡り合うにはどうすればい

*こんな話です 昨夏、ロケット甲子園に2度目の挑戦をしたネオらチームMERN(メルン)。1回目の打ち上げは目標高度近くまで飛んだものの、ロケットに搭載した生卵が割れてしまい記録なしに。チームは2回目の打ち上げを前に、大きな決断を下す。高度を犠牲にしても、卵を守りにいく作戦だった。

いのか。喜びよりも緊張と不安が心に押し寄せてきた。

「新兵器」開発中

2019年が明けたいつもの理科室。4人は国際大会出場に向けて、真剣な表情で作業にあたりていた。いつもは電動ノコギリの音が響き渡るのだけど、最近は少し様子が違う。

課題の一つがサイエンス・イングリッシュ(ク)。国際大会では、ロケットを飛ばすだけでなく、工夫した点を英語でプレゼンしないといけないのだ。

「空気抵抗……う〜ん。エア・レジスタンス?」「おっ、そのままだけ正解!」なんて、繰り返し。大会までにはやらなければならぬことが山ほどある。

一方、ネオの手にあるのは、卵を守る新兵器・発泡スチロール製作。無我夢中でやっているうちに気づけば、パリの空を目指すようになっていた。

最近「ロケット女子」と呼ばれることもあるけど、確かに。この4年、私たちが経験した変化。は大型ロケットが描く軌道そのものだったかも。

どこまでも繊細で、どこまでもまっすぐに。世界でも、私たちが思い描いた軌道を見せつけたい。

ネオは今、そう思っている。

(完)

(写真・隅谷真 文・山田佳代)